

日本細菌学会 関東支部ニュース

第27号

第76回日本細菌学会関東支部総会と3学会合同シンポジウムのご案内

前回の日本細菌学会関東支部ニュースにおいて、「今年は飛躍の年になるかもしれない」と皆さまにお便りしました。毎年毎年関東支部総会はやって来ては去って行きます。不変にみえるこの学会にも年々確実に変化が起きている。それでは、この変化のなかで何が飛躍といえるのでしょうか。第75回関東支部総会（千葉大学、澤井教授）では、われわれは*Helicobacter pylori*の胃潰瘍形成における重要性を認識いたしました。そして第76回関東支部総会が間近に迫ってきました。この学会ではいったい何が起こるといえるのでしょうか。第76回総会は平成8年11月13、14日に東京女子医科大学弥生記念講堂で開催されます。弥生記念講堂は女子医大創立者吉岡弥生先生を記念して建築された見事な様式の講堂です。東京は山あり谷ありという起伏に富んだ地形をしています。本学の所在地は東京で最も山手で高所に位置します。それ故に、新宿の高層建築は一望のもとに見渡せ、夕日を背にしたその姿は一見に価します。ほとんど知られていないことですが、本学の自慢のひとつです。昭和50年11月に故吉岡守正学長（前微生物学教室教授）が関東支部総会を開催されてから20有余年が経過し、以前ご参加の先生方も大学の姿容に驚かれると思います。

学会の主人公は学会本体と、3学会合同シンポジウムであります。学会本体について説明しましょう。まず固有のシンポジウムとして、「ヒトから細菌までのゲノム解析と遺伝子治療の現状（司会、大阪大木下タロウ博士）」と「感染・発症のメカニズム—病原因子再考（司会、杏林大神谷茂博士と筑波大林英生博士）」。今世界的規模でなされている遺伝子解析と治療の現状を知ることは、私達の研究にきつと大きな影響をあたえるでしょう。感染症の発症機序を深く考えることはわれわれに最も必要な事であり。そして、様々な分野から応募された一般演題50題。今世の中は、shiga-toxin-producing



東京女子医科大学
微生物学免疫学教室
中検感染対策科
内山 竹彦

E. coli, STEC感染症で持ちきりですが、本学会でもこの感染症の最新のデータが数多く発表されます。重要なことは、最緊急懸案の解決と同時に、これまで蓄積になされてきた研究を世に問い、評価することです。

つぎに、3学会合同シンポジウムについて。第43回日本化学療法学会東日本支部総会（総会長、日本大中山一誠博士）と第45回日本感染症学会東日本地方会（総会長、順天堂大渡辺一功博士）の合同学会に本支部総会が参加して、11月16日土曜日に合同シンポジウムが開催されるのです。課題は共通性の高いテーマとして、「化学療法薬は何故効き、何故効かなくなるか（司会、帝京大岡井乙彦博士と北里研橋本一博士）」が選ばれました。この合同シンポジウムの成立は吉川昌之介支部会長のご尽力に負うところが大きく、来年初「3学会合同学会」のための準備としての意味があります。ただの仲良しクラブの結成ではありません。今回のSTEC感染症の事例でもおわかりのように、今や感染症の克服には基礎細菌学と臨床医学の協力体勢が必須なものとして要求されます。われわれの研究はほかの2学会の人々に大いに学ばれ吸収される価値があると確信します。同時に、2学会の研究結果もわれわれにとって吸収する価値が高いと考えます。Give and Take、吸収し吸収され、勉強し勉強され。皆さま、この新しい試みと一緒に成功させようではありませんか。

第77回日本細菌学会関東支部総会に向けて

東京歯科大学微生物学講座

奥田 克爾

腸管出血性大腸菌O157が猛威を振るい、MDR-TBの広まりが多くの人々を震撼させている。細菌が逆襲に転じ細菌感染症は甦っているといわれる時期に第77回の細菌学会関東支部総会を引き受けることになり緊張感でいっぱいである。

インバクトの強い細菌感染症が多い中で「日和見感染症」をテーマにしたが、とまどいを感じられる会員もおられるかもしれない。しかし高齢者の激増などがあり我が国では、死亡原因の最も高いのが日和見感染症である。また進歩した医学のツケとも考えられる日和見感染症は、先進医療の脚を引っ張っているともいえる。これらの事を念頭において初日の午前中には一般講演、午後には特別講演で「結核菌」を取り上げ、シンポジウムは「日和見感染起因微生物の分子生物学」としたい。ブドウ球菌、歯周病原菌、緑膿菌、*Candida albicans*を取り上げたい。セラチアやレジオネラについても取り上げた方がよいかもしれないが、それらについては特別発言などがあればと期待している。何故ウイルスを取り上げないのかとお叱りを受けそうな気がするが、対象となるウイルス感染症が多いため現段階で考えていない。

二日目は午前中の一般講演、午後の「粘膜免疫」に関する特別講演に引き続き「日和見感染におけるcompromised hostの問題点」のシンポジウムを計画している。第70回日本細菌学会のわずか3ヶ月後であるため、シンポジウムの内容に重複がないよう配慮する予定である。

一般演題が多数集まることを期待している。類似した課題や同じ菌について複数の演題があればワークショップとして組み込んでいくことも考えている。

学会の日程は平成9年6月26日（木）、6月27日（金）の2日間とする。

会場は「アルカディア市ヶ谷」JR市ヶ谷駅徒歩1分と交通の便のよい会場を選んだ。

日和見感染起因微生物の研究には、地味な感じがするのはKochの条件を満たすよう感染症ではないからかもしれない。日和見感染症起因微生物の多くは、病原因子として決定的なものがないように思えるが、定着因子、産生毒素や酵素、組織侵入性、生体防御機構からの回避などが分子レベルで解析され、病原因子を支配しているものが明らかにされつつある。「日和見感染起因微生物」のコーディネーターをしていただく先生方に、独自の洞察をもたれて論理的に研究を展開されている方をスピーカーに選んでいただき、ホットなディスカッションがなされることを期待している。

医学の進歩は高齢者の爆発的増加さまざまなcompromised hostを生み出している。それらの宿主の易感染性を的確に把握することは至難のことと思われる。しかしながらあえて「compromised host」を取り上げることによって日和見感染症のfuzzyなものなかからある方向性を見出せないかとも考えたからである。コーディネーターをしていただく東大・医科研の成内秀雄教授から下記のようなFaxを受け取っている。「感染防御免疫におけるcompromised hostの問題点は免疫を担当する細胞各々のレベルに存在する。この観点から、このシンポジウムでは初期防御を担当する好中球、液性免疫と細胞性免疫の双方に重要なT細胞、抗体産生細胞前駆細胞としてのB細胞、の不全状態について、また、MHC分子の免疫制御に於ける役割とその欠損がもたらす免疫不全についての講演を臨床に基盤を置きながら、各々の領域で分子レベルの研究をしておられる演者に依頼し、各免疫担当細胞の機能不全を解析する。この上に、代表的免疫不全疾患を例にとって免疫不全状態を解析し、compromised hostの問題点を整理し今後の研究の視点を見出すための議論を行いたい。」開催までまだまだ時間があり会員の先生方からのご意見を頂ければ幸甚である。

「腸管出血性大腸菌O157の流行の教訓」

国立予防衛生研究所

渡辺 治雄

“悪夢は忘れた頃に到来する”1990年に浦和の幼稚園で腸管出血性大腸菌による溶血性尿毒症症候群(HUS)で2人の犠牲者を出した時、今回程の大きな流行を予測したヒトがいたであろうか。国立予防衛生研究所で発行している病原体微生物情報で確かにこの菌による疾患は単なる食中毒ではなく、感染症としての位置づけをはっきりさせ、その対策をとることの必要性をとえたと、これ程までの流行を立て続けに起こすことは考えてもいなかったように思う。

最近の傾向として、食中毒の事件数は減ってきているが、一件当たりの患者数が増えるという食中毒の大規模化が指摘されてきてはいたが、それが起こっては欲しくない病原体により現実のものとなってしまった。食生活様式や文化・流通体系の変化による事象だといってしまうとそれまでだが、我々の周りには、今後も予期しないまたは出来ないことが起こりえるという前兆のかもしれない。

かと言ってあまり悲観的なことばかりいっては行れない。HIVスキャンダル、および今回のO157事件をひとつの機として、来年4月から国立予防衛生研究所(再度の組織再編で国立感染症研究所と名称変更の予定)に、感染症情報センターが設置されることが急に決まり、その準備が進められている。患者情報、病原体情報、感染症治療情報を一括して国立予防衛生研が収集・解析し、それを公衆衛生関係者、医療従事者等に還元しようという構想である。アメリカのCDC的機能の一部を担うことになるわけであるが、構想を現実のものとするためには、“絵に書いたモチ”ではなく、それを動かすヒトと資金が必要である。アメリカでは感染症への国の取り組みとしてCDC, NIH(NIAID), FDAが三角形の骨格をなし、人力と資金力で支えているわけである。日本の動きはそれに比べ足下にも及ばないものであるが、理想までは程遠いとしても今回の事件により一歩踏み出したと考えれば、亡くなられた方々に対するひとつの償いとなるのかもしれない。

又、それらの人材の供給源としての大学の役割りもより重要になってくることは言うに及ばないであろう。細菌学を専攻する人の少なさが今回の事件により、よりクローズアップされたわけであるが、それと同時にMedical Epidemiologistの概念を教育する公衆衛生学の重要性を再度考え直さなければならぬように思う。今回の事件を機に感染症に対する関心が、行政にも一般の人々にも高まったような気がするが、これを一時の“流行”に終わらせないようにするためにも細菌学会としてもどのようにするのか議論が必要に思う。

「O157の多発に学ぶ」

国立小児医療研究センター

感染症研究部 竹田 多恵

今年5月末に岡山を発端として各地で集団発生した大腸菌O157は社会騒動のみならず、政府閣僚までも動かす大きな力となった。我々細菌学者にとっても大変な刺激となった。今夏ほど真剣に食するように勉強したのは多分私だけではなかったかと思う。我々は細菌学会の活性化を願って久しいが、その効果はこのわずか3ヶ月のO157の威力にははるかに及ばない。

この数年、小児のHUSの原因としてのO157の重要性を小児科領域の先生には個々の例として伝えてきたが、その集積がこれほど関心を持っていただけるとは期待しなかった。ただ、国内にかなりの頻度で汚染しているに違いないO157の感染ルートがどうしてもわからないのがくやしい。この夏、これだけの多発があれば、必ずそのしっぽは見えるに違いないと密かに期待したが、また灰色のままに終わろうとしている。連続発生を聞いた時、なにより先にこれらが同一のStrainか否かが大変気にかかった。PFGEですぐDNAの同一性を調べた。当小児病院でも6月初旬に患者が出て、その菌が邑久町の株と同じパターンを示した時は我が目を最初は疑った。コンタミをさせたのではないかと細心の注意を払って、もう一度便からの分離を試み、PFGEを行った。結果は同じであった。少し恐ろしい気持ちと、どこまで同じStrainの拡散がおこっているのか早く知りたい思いがつのった。その後、この菌と同じものは集発例以外に散発例として16都府県から検出されている。堺市の株は違ったタイプであったが、関西地区の多くの散発例と共通している。岡山での事件以降、国を挙げてその予防を呼びかけたにも関わらず、O157が堺で6000人を越える患者を出したニュースを聞いた時は、細菌の不敵さを思い知らされた。

「大腸菌O157雑感」

明治薬科大学微生物学教室

新井俊彦

大腸菌O157感染症が指定伝染病になった。しかし、不思議なことに患者の人権を尊重して隔離はしないそうである。菌を伝染されて死ぬ小児の人権は考慮しないのが人権家達の人権なのであろう。伝染病は患者のみでなく、健康保菌者を隔離しなければ根絶できない。隔離とは排菌が無くなるまで非感染者と一切の生活を別にすることで、閉じ込める事ではない。その患者のみ受け入れる病院内なら、構内の緑地を自由に散歩して良いのである。

私とO157との関わりに話を戻すと、カナダから1988年の分離菌を15株貰い受けたのが始まりである。これらは食品からの一次感染者由来の株であったので、薬剤感受性菌であった。しかし、今度の流行は行政の誤った対応の結果広がったヒトからヒトへの二次感染菌であるので、耐性化する可能性があり、少数ではあるがすでに私の手許にも耐性菌が来ている。まだ確認できていないが、これはRプラスミドによるものである可能性が高い。

次に検出用の分離培地であるが、色々なメーカーが高価なものを売出そうとしているが、そんな必要は無い。O157株にはバイオタイプが二つあるが、いずれもズルチットを利用できる。腸内細菌科に属する菌でズルチットを利用するのは、*Klebsella*, *Salmonella*と一部の*Proteus*のみある。従って、ズルチットを唯一のC源とするDHL様培地を造れば*Salmonella*と*Proteus*は硫化水素を産生するので除外できるのである。

さて、この培地の試験で気付いた事であるが、O157菌と一般の大腸菌の培養を混合してこの培地に分離したところ、一般の大腸菌が殺された。これは用いたO157株がコリシンを産生している事を示唆している。カナダ株でも赤痢菌の様に140Mdalのプラスミドを持ち、細胞侵入性のある株や3-4Mdalのプラスミドを持ち、コリシンを産生する株があったが、今流行株もこのような株であるらしい。

今秋はこれらを明らかにする事になろう。

インターネットの使い方

北里研究所 川原一芳

インターネットを使って最新の学術情報を得る方法について簡単に紹介します。自分のパソコンからインターネットへの接続はMacの場合ネットスケープナビゲータ、Windowsではそれ以外にインターネットエクスプローラなどのソフトが使われますが、いずれもインターネットに接続されるとフロントページが現れます。ここから先は3通りの検索方法がありますので各自の状況に応じて選択して下さい。まず探したいホームページのアドレスが分かっている場合、例えば国立衛試のホームページにアクセスしたい場合URL(<http://www.nihs.go.jp>)を入力し、[開く]をクリックして下さい。すると項目が出ますのでクリックしながら進み目的のページを見つけます。次にアドレスが分からない場合ですが、[ネット検索]をクリックすることにより情報検索システムが開きますので、その中から[Yahoo!]を選んで下さい。(英語版をお使いの方は下段の[Yahoo! Japan]を選び、さらにページが開いた後に上部に表示された[Yahoo! Japan]をクリックし、日本語を表示にします。)開いたフロントページの中にキーワードを入力する項目がありますのでここに知りたい情報のキーワード、例えば[O157]と入力して検索します。キーワードに関する情報を含んだ全てのアドレス(例えば国立衛試のアドレス)が紹介されますのでここからはまた自分の興味に従ってクリックです。3つ目の方法は先ほどの[Yahoo! Japan]からカテゴリ別に進んでいく方法で、例えば[政治] → [研究機関] → [国立衛生試験所] → [病原性大腸菌O157関連情報] というふうに行って行きます。最初に該当しそうなカテゴリを下って行き、最後にキーワードを入力して検索する方法も有効です。モデムを使い、PC-VANなどのプロバイダを介してインターネットを利用する場合にはやり方が少し異なりますが[Yahoo!]までたどりつけばあとは同じですからぜひ気楽にお試し下さい。

集 会 案 内

○第30回腸炎ビブリオシンポジウム

日 時：平成8年10月17日（木）～18日（金）午前中
場 所：和歌山県白浜市才野字西山1670-76
ホテルエクシブ白浜アネックス
特 別 講 演：Non-culturable, but viable ビブリオの意義
問 合 せ 先：大阪大学微生物病研究所細菌感染分野 本田 武司
☎06-879-8276、FAX：06-879-8277

○第31回緑膿菌感染症研究会

日 時：平成9年1月31日（金）、2月1日（土）
場 所：横浜市教育文化ホール 横浜市中区万代町1-1
特 別 講 演：Dr. Iglewski: The regulatory mechanism of gene expression
of pathogenic factors in *Pseudomonas aeruginosa*
シンポジウム：ワクチン及び遺伝子治療による緑膿菌感染症コントロールへの試み
演 題 締 切：平成8年11月29日（金）
問 合 せ 先：横浜市立大学医学部細菌学教室
第31回緑膿菌感染症研究会事務局
☎045-787-2602、FAX:045-787-2509

○第12回日本環境感染学会総会

日 時：平成9年2月21日（金）、22日（土）
場 所：ホテル新潟 新潟市万代5-11-20
特 別 講 演：耐性菌を指標とした院内感染の予測
一般演題締切：平成8年11月2日（土）
問 合 せ 先：新潟大学医学部第二内科 五十嵐謙一
☎025-223-6161（内線2518）、Fax:025-229-1808

○第27回嫌気性菌感染症研究会

日 時：平成9年3月8日（土）
場 所：山口県教育会館 山口市大手町2-8（県庁前）
会 長 講 演：嫌気性菌の病原因子
シンポジウム：嫌気性菌検査の実際
問 合 せ 先：山口県立中央病院 内科 中村 功
☎0835-22-4411、Fax:0835-38-2210

○第10回臨床微生物迅速診断研究総会

日 時：平成9年6月6日（金）
場 所：日本化学会 化学会館ホール 東京都千代田区神田駿河台1-5
問 合 せ 先：日本大学医学部第三外科細菌研究室 中山一誠
☎03-3292-7027、FAX：03-3292-7028

議 事 録

平成6～9年 第5回日本細菌学会関東支部評議員会

日 時：1996年1月20日(土)、午後2時～5時

場 所：日本歯科大学 1号館4階 第3会議室

出席者：新井俊彦、池田達夫、伊藤 武、井上松久、伊豫部志津子、
内山竹彦(兼第76回総会長)、梅本俊夫、奥田克爾、川原一芳、近藤誠一、
佐藤謙一、平松啓一、松浦基博、水口康雄、山本友子、澤井哲夫(第75回総会長)、
吉川昌之介(支部長)、長井伸也(幹事)、古西清司(幹事)

欠席者：江川 清、大国寿士、野田公俊、辨野義己、宿前利郎、吉田洋子(幹事)

1. 第3および第4回関東支部評議員会議事録の承認

第3および第4回関東支部評議員会議事録については、異議なく承認された。

2. 第75回支部総会準備状況報告

澤井総会長より、第75回総会(平成8年6月27・28日 千葉大学けやき会館にて開催予定)の準備状況に関する報告があった。この中で、本総会では学会員以外の地域の医療関係者にも広く参加を呼びかけたいが、シンポジウムのみ参加する会員外の出席者の参加費をどうすべきかという質問があった。これに対して評議員会は、それは当該総会の総会長の判断に委ねるべきものであると回答した。

3. 第76回支部総会準備状況報告および感染関連三学会“支部”合同集会交渉状況報告

日本細菌学会関東支部と日本感染症学会東日本地方会および日本化学療法学会東日本支部総会との合同集会交渉の進捗状況については吉川支部長より、第76回支部総会の準備状況については内山竹彦総会長より報告があった。その中で、第76回支部総会において、3学会共催の合同シンポジウムの開催が以下の内容で予定されていることが報告された。

日 程：平成7年11月15または16日

場 所：経団連ビル(東京・大手町)

テーマ：細菌の薬剤耐性

参加費：細菌学会関東支部総会の参加費を納入すれば合同シンポジウムにも無料で参加できる。但し、合同シンポジウム以外の他学会独自のプログラムに参加する場合には、各々の学会の参加費を別に支払う。

合同シンポジウムの件に関連して、支部長からの次のような提案があった。

①次回の支部ニュースに、合同シンポジウム開催の件を掲載したい。

②第75回の支部総会の会期中に、合同シンポジウムに関する紹介時間を設けて欲しい。これらについては、異議なく了承された。

4. 本部議事録修正交渉の結果について

平成8年度第1回日本細菌学会本部理事会(平成8年1月13日開催)に吉川支部長がオブザーバーとして出席し、平成7年度第3回本部理事会記録B審議事項10その他(3)の記載部分について、関東支部評議員会としての見解を説明した経緯について吉川支部長より報告があった。これに関し、「吉川関東支部長の説明を了承し、前理事会記録は誤解をあたえる可能性があることを認めた。」と記載された平成8年度第1回日本細菌学会本部理事会記録(案)について、その内容に相違ないことが本評議員会にて確認された。

5. 第77、78回支部総会長選出について

吉川支部長より、合同学会開催を円滑に行う目的で、総会長選出のスケジュールをやや早めたいとの提案があった。具体的には、第77、78回の総会長については次回の評議員会で決定する。第79回以降は順次決定時期を早める。なお、第81回の総会長は次期評議員会が決定するものであるが、その準備は本評議員会で行っておく。

この提案に関しては、異議なく了承された。

新井理事より、総会長選出に関するアンケート実施の際、第一回目は候補者とその推薦理由について記載し、第二回目は投票の形式をとれば総会長選出を早期に行えるのではないかという意見が出された。これは学術集会委員会での検討事項となった。

平成7年8月7日に開催された細菌学会関東支部会、化学療法学会東日本支部会お

